

公邸内部。



その見聞にもとづいてザラ紙に百三ページにわたって書いた日本の鉱物資源と鉱業に関する報告などは、その一例である。マーラー自身もこの国をよく知り、在日カナダ人とも会うために、日本各地をよく回って歩いた。一九三〇年にマーラーとキンリーサイドは中国を訪れた。マーラーは上海、南京、香港、キンリーサイドは朝鮮、満州、中国北部を回り、商業上の情報や政治情報を収集した。一方、マーラー夫人もそれに劣らず多事多忙の日々を送っていた。最初の一年間に、公使夫妻がもてなした客は二千五百人以上にもなったほどである。

だが、公使館の施設が手狭なことがわかってきた。マーラーが東京に着いて間もなく、公使館を当時丸の内にできたばかりの帝国生命ビルに移したが、商務関係の仕事全てを公使館本部に集中することになってから、ここもまた十分でなかった。だが首相からは、承諾の返事を得られなかった。キング首相はその頃、ワシントンの駐米公使館用として五十万ドルに近い支出を行っており、その法外な金額に彼個人としてはショックを受けていたのだ。議会からは何の批判も出なかったが、当時の経済が国内的にも国際的にもますます暗い見通しに陥っているときでもあったし、首相としては海外公館費として、これ以上大きな出費を許す気になれなかった。

恒久的公使館の建設

その中で特に良さそうな四か所が選ばれた。いずれも六本木の交差点から南あるいは南西へ入ったところにあった。マーラーはキング首相に、新しい公使館の土地購入費は約四十万ドル（二十万ドル）ぐらいになるだろうと知らせた。その際彼は、この値段は少々高いかもしれないが、政府の出費は最終的に借家費用とさして変わらないだろう、と書き添えるのを忘れたかった。



マーラー夫妻。明治神宮の前で。

か所の土地を候補にのせたこと、またそこに建てる建物は最初の候補地の場合が総額で二十九万一千ドル、第二の候補地が三十四万一千ドルでできることを告げた。もし政府が十年間で償還してくれば、マーラー個人の資金をもって土地の購入ならびに適当な建物の建設にあててよいとまで申し出た。しかしながら、ベネット首相は閣僚を説得することができず、公使は再び失意のうちに東京へ帰任した。

一九三二年の夏頃まで、マーラーは政治のかけひきよりも、外交活動を楽しむようになっていた。夫婦ともども本国政府が望むかぎり、いつまでも日本にとどまって構わない、と政府に伝えている。もし政府が自分たちの滞在継続に同意するならば、自分たちは家族や友人と離れて暮らすのだから、何らかの代償があつてしかるべきだろう、とマーラーは考えた。そして再び新公使館建設の件を持ち出したのだ。恒久的な公使館と公邸があれば、その効果は（彼自身の幸せはもちろんのこと）測りしれないものになるだろう、と彼は主張している。

ここでマーラーは、政府にとって大変魅力的な提案を行なった。彼が土地を買って、そこに公使館と公邸を建てようというのである。費用は二十万ドル以内にとどめ、政府は十年間で彼に返済してくればよい。彼自身も自分の資金を最低二万五千ドルは拠出しよう、というものである。

ベネットはこの提案を閣議にかけた。マーラー自身も閣議に同席させた。かくして直ちに承認を得ることができた。正式の承認は、一九三二年八月三十一日に出された。

マーラーは大いに喜んだ。東京に帰任して間もなく、旧笹山藩十三代目藩主であった青山忠俊子爵の所有する格好の土地が見つかった。マーラーが当初必要だと考えていたのより広く、三千七百五坪もある地所だったが、当時、円の価値が一時的に下落していたため、価格は特に買手に有利となっていた。場所そのものは申し分なく、あらゆる点からみてマーラーの抱いていた規準にぴったり合っていた。公使館としても公邸としても適切で、年月を経ても価値の変わらない土地